

Title	北京図書館蔵正史宋元版解題抄：「正史宋元版の研究」補訂
Sub Title	Bibliographical notes on the official historical works of Seng-Yuan editions collected in Peking library
Author	尾崎, 康(Ozaki, Yasushi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1995
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.64, No.3/4 (1995. 4) ,p.1(255)- 12(266)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19950400-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

北京図書館蔵

正史宋元版解題抄

—「正史宋元版の研究」補訂—

尾崎康

前著「正史宋元版の研究」（一九八九年 汲古書院刊）

は、当時の情勢から龐大な中國大陸所在本の調査はまだかなり難しいとみて、日本と台灣所在本をもつて一書とすることとし、一九八七年春にはすでに初校刷を手にしていた。その直後、幸に上海、北京、南京で正史の重要な版本を一〇数点ほど調査する機会を得、その結果をこれに加えた。その際、北京図書館蔵本については、閲覧

として公表しておきたい。
「北京／図書／館蔵」印は全本に捺されているからここには略す。なお、標題の末の冊数の次の（ ）内の数字は前著の頁数である。

史記存一五卷（卷五・四八・四九・五六・六一・七二）

漢司馬遷撰 劉宋裴駟集解 唐司馬貞索隱

北宋刊の史記と南宋中期建刊の南史を見るにとどまつた。

そこで次回（九一年秋）は時間をかけて調査するよう心がけたが、それにも点数に限りがあり、さらに再び編年類にも意を注いだから、数限りなくある正史のわざかに九本を閲覧したにすぎない。しかし前著の記述に欠けるところのある本を選んで行つたから、結果をその補訂

元大德「九年」饒州路儒学刊三冊（一〇四頁）
一九五九年刊の北京図書館善本書目著録されず、台北、日本に同版本がないために、賀次君氏の史記書録等によつて誌したが、集解本と錯覚してその項に列するという大きな誤りを犯した。卷数そのほかにも疑問が多くつたので、実査の結果に基いてここに訂正する。

北京図書館古籍善本書目には、もう一本、存三巻（巻

爲秦世家
不可降

史記第五

」。

二三礼書・二五律書・二六曆書）一冊があり、函架番号を異にする。中国古籍善本書目は、この両本を合せて存

一八巻と著録する。賀氏が一八巻とするのも同じことと思われるが、氏は律書がなくて代りに巻二四樂書を存としている。

後補暗朱色表紙（三〇・六×一一・一七セン）、金鑲玉装（料紙高さ一八セン）。第一（三）冊の題簽は「宋版百衲史記列伝十六（二十一）」と墨書する。先にも少し触れたが、藏園羣書經眼錄に著録の傅增湘旧蔵の百衲本の一部であることを示すもので、同本にはこの版がさらに表二巻、書八巻、世家一巻の計二六巻あつた。なお百衲本としては、他に南宋初期淮南路轉運司刊の集解本の三九巻、南宋中期黃善夫刊の三注本四巻、蒙古中統二年段子成刊の一注本四巻、元至元二五年彭寅翁刊の三注本七巻をもつて構成されていたという。

各冊の副紙やそれに添えた小紙片に、それぞれ所收の巻とその丁数を記す。第一冊は紀・世家の四巻を、二・三冊に伝の一卷を收める。

卷五の巻首は、

「秦本紀五素隱曰秦……
以諸侯之……
……」

漢司馬遷撰 劉宋裴駟集解 唐司馬貞索隱 唐

双辺（一一・七×一五・四セン）、一〇行、一二二字・注文小字双行。

版心 線黒口、上象鼻の右側に「饒学」等の刊行を担当した江東建康道の饒州路の儒学名等を刻し、丁付や下魚尾の次に刻工名がある。路学等の名は、饒路学・堯學・路學・番學・番江・番・錦江・樂平。その下に補刊と附記する例が二、三あるが、すべて同時の原刻葉である。番は鄱陽県学、錦江は錦江書院、樂平は樂平州学の略であろう。刻工名は、丁義之 丁福 丁応付 正甫 玉甫 朱元秀 何璋甫 珍叟 范玉甫 が同じ饒州路刊の隋書の者と合い、他に一陽 丁正甫 王愛 可福 包楫 付正父 呈氏 呈義父 尚父 洪尚父 胡寧 柴寿 鮑珍があり、单字は略。

朱句点と声点が付されてある。蔵印は「緯簫草堂／蔵書記」「商丘宋犖／收藏善本」、「国立北／平図書／館收蔵」。

史記存六八巻（巻一・四一・二一・一九一・二一・二一・三〇・三九一・六七・七三一・九〇・一三〇）

張守節正義　〔宋紹熙中〕建安黃善夫刊

緝」の朱印を捺す。

二八冊（二三三頁）

旧刊の北京図書館善本書目と中国古籍善本書目にこの通り著録されるが、一九八七年刊の北京図書館古籍善本書目では冊数は同じのまま卷二九が消えてしまった。しかしこの巻は雙鑑樓善本書目にある河渠書で、わずか八葉ながら一冊として現存する。いずれも狩谷楨斎求古樓旧蔵本であつて、一度は涵芬樓に六六巻、傅氏雙鑑樓に一巻、潘氏宝礼堂に一巻と分たれたものが合わされたようである。これについて北京図書館善本書室の沈燮元氏が、同館に二六冊、一冊、一冊の三次にわたって購得された記録が存する旨をご教示くださつた。

なお同版本として中国古籍善本書目には別に北京図書館蔵の卷八存一巻を著録するが、これは同館の両目録にともにみえない。

後補金切箔散紫紺色表紙（一八・五×一八・三セチ）。やや大きく裏打し、本文の料紙の高さは二六・五セン。傅氏旧蔵の巻二九は丹表紙。潘氏旧蔵の巻三〇・八六は金色梅樹文様薄紫色表紙、巻八六は中央に「史記残本」（隸書）／「弓八十六刺客列伝第一十六／宋刊宋印本乙卯十月寒雲」と墨書し、裏表紙に「乾隆季仿／澄心堂

史記索隱序、史記正義序、史記集解序、その末に「建安黃善夫刊／于家塾之敬室」の木記、さらに補史記序、史記目録、その末に「建安黃／氏刻書」（篆書）の木記、そして三皇本紀、史記正義論例謚法解と続く。この目録末の篆書の木記のところが上杉本（国立歴史民俗博物館現蔵）は欠けて、元至元二五年彭寅翁刊本の双行木記が補写されている。上杉本にもともと黃氏の篆書の木記がなかつたとすれば、漢書、さらにあるいは後漢書の求古樓本と上杉本との相違が明らかになるのであるが、いまそれがわからない。

「五帝本紀第一（隔六格）史記一」、左右双边（一九・七×一一・五セン）、一〇行一八字注文小字双行二三字の行格や版心等、本文の版式は上杉本と同じ。「太史公自序第七十 史記一百三十」の尾題。その後に史記索隱後序がある。索隱後序は東京大学東洋文化研究所本の巻三の末にあるが、重複の理由はわからない。

朱筆で句点、朱引、ヲコト点、声点、連合符、眉上の注記や校語が墨筆で返点、振・送仮名、眉上の注記等が書入れられてある。室町後期のものとみられるが、これについて張元濟が「爲彼国人士点閱、雜以片仮文、不免

如浮雲之溝耳」（涵芬樓餘書錄）と言ひきつてゐるのもおもしろい。

卷一末に次の二行が墨書きされる。

「上虞羅振玉獲觀」〔臣玉之印〕（篆書）

「島田先生家藏宋慶元刊本丙午冬黃紹箕獲觀」〔黃印〕
〔陰〕「穆琴」。丙午は明治二九年（一九〇六）である。

藏印は京妙覺寺日典、狩谷楨斎、浅野梅堂、島田重礼、右の黄紹箕、袁克文（袁世凱の次男）、そして張元濟と涵芬楼のものがある。「妙覺寺」〔住常〕「日典」、「湯島狩」〔谷氏〕、「浅野源求古樓」〔図書記〕、「楨斎」〔狩谷〕、「望之」〔陰〕、「浅野源氏」〔五万卷樓〕、「図書之記」、「淺野」〔氏章〕、「長祚」〔之章〕〔陰〕、「錢長祚」〔特賞印〕、「錢胤卿」〔賞識〕、「漱芳」〔書印〕〔陰〕、「漱芳」〔閣賞〕、「漱芳閣」〔新收記〕〔陰〕、「漱芳閣」〔鑑藏印〕〔陰〕、「漱芳」〔閣〕、「源賞」〔梅堂閣藏〕〔文〕、「梅堂」〔經眼〕、「蔣漂」〔鰐侶〕〔陰〕、「子孫」〔世昌〕〔陰〕、「島田」〔重礼〕〔陰〕、「篁村島」〔田氏家〕、「藏圖書」〔島田氏〕、「雙桂樓」〔藏書記〕、「島田氏雙」〔桂樓所藏〕、「雙」〔桂〕、「書」〔樓〕、「敬」〔甫〕、「島田翰」〔讀書記〕〔陰〕、「伏侯」〔獲見〕、「田偉」〔後裔〕〔田吳炤〕、「後百」〔宋〕、「一塵」〔後百〕、「宋」、「一塵」〔与〕、「身俱存亡」〔寒雲〕、「秘笈」〔珍藏之印〕、「寒雲」〔鑒賞〕、「之記」

〔円稿〕「皇」〔二子〕〔陰〕〔左右対称〕〔龍文〕「接」〔宋〕〔袁克文〕、「海塩」〔張元濟〕「經收」〔涵芬樓〕「涵芬」〔樓藏〕〔陰〕、他に「伊勢棟雪」〔鳥陽〕〔陰〕等。

黄善夫刊三史はあまりに著名であるが、三史叢刻本として伝存するのはきわめて稀で、わが国に米沢上杉家旧蔵本と狩谷楨斎求古樓旧蔵本が知られるにすぎない。求古樓本は分散し、欠巻があるが、松本市立図書館に漢書が、天理図書館に後漢書が蔵されることは前述した通りである。史記はさらに各所に散り、その中心がこの本であるが、いまこれを追うこととする。

さて求古樓の史記は、経籍訪古志には存七二巻、欠凡五八巻であるとし、欠巻の巻次を挙げている。この数字はその後の記録と合致し、それ以上に失われることがなくて浅野梅堂、島田重礼に伝えられた。そして卷一末の識語に、また涵芬樓餘書錄にも「瑞安黃學士紹箕游歷日本、獲見是書」とあるように、丙午の冬すなわち明治三九年（光緒三一・一九〇六）黄紹箕はおそらく島田邸でこれを見たのである。羅振玉の日本への移住は辛亥革命の一九一年であるから、それ以前の来日のときに識語が書かれたのであろう。

その直後にこの七二巻は中国に戻された。涵芬樓餘書

書録、宝札堂宋本書録、藏園羣書經眼錄に次のようにい
う。

是本先由荊州田氏得之東瀛。宣統季年、余購之廠肆、

書本殘欠、又爲市估分截數卷。今所存者、……凡得
六十六卷。

(涵錄)

清末有鄂人田氏購得之攜以歸國。不久散出、余友張
菊生得六十余卷、以歸涵芳樓。余所得者、僅此平準
書・刺客伝二卷而已。

(寶札堂)

存河渠書・平準書・計二卷

張菊生元濟前輩曾於正文齋收得殘帙、凡六十九卷。

是田伏侯獲自東瀛者。……乙卯夏袁抱存克文挙是帙
相貽。……乙丑春日藏園記

(經眼錄)

(ただし雙鑑樓善本書目には「河渠書一卷」だけ
を著録する)

すなわち清末宣統元年に田氏がこれを購つて北京に齎
し、直ちに手離して書肆に渡したらしい。田氏について
はこの次に述べる。それが分売されて、張元濟は大半の
六六巻を得たが、それは正文齋においてであるという。
さらに南海宝札堂潘宗周が卷三〇平準書と卷八六刺客列
伝を求めたのであるが、この刺客列伝には袁克文(寒
雲)の乙卯(民国四年・一九一五)一〇月の題識がある。

傅增湘は卷二九河渠書をその袁克文から贈られたが、そ
れも同年の夏であり、この丹表紙は日本の近世初ごろの
もののように思われる。

この他に卷一・三の一巻が北京の弁護士大木幹一氏の
手に入つて、いま東京大学東洋文化研究所に蔵される。
これもおそらく同時に再び中国に渡つたものであろう。
ただ卷二二漢興以来將相名臣年表だけが求古楼以後、
まつたく所在を明らかにしない。

さて鄂人田氏についても、沈燮元氏から質問に対しても
次のようにお教えをいただいた。

田吳炤、湖北江陵人、字伏侯、後改名潛。光緒二十三
年(一八九七)肄業于兩湖書院、光緒二十四年(一八
九八)游學日本、著有「說文二徐箋異」二十八卷、宣
統二年影印本、「一切經音義引說文箋」十四卷、民國
十三年刻本。「田偉後裔」即其藏章。田偉、宋人、本
燕人、爲江陵尉、遂家焉。藏書三万七千卷、無重複者。
其詳見葉昌熾「藏書紀事詩」。以上所述、雖不尽如人
意、猶能淺嘗一鱗。貴國橋川時雄「中華民國文化界人
物總鑑」雖有「田潛」條目、然下注生平不詳、未免遺
憾、田氏生平資料、以後如續有所護、當再奉聞。

田氏は光緒三四〇翌年に三たび訪日している(新編の

江陵県志)。三校中の沈氏の再三の教示による。

また張元濟が購つた廠肆の正文齋というのは、北京の琉璃廠にあつた書店であろうか。孫殿起の琉璃廠小志(一九八一年 北京古籍出版社本による)の第四章 販

書伝薪記に「正文齋 譚錫慶、字篤生、冀縣人」があり、第三章書肆変遷記の記廠肆坊刊本書籍にも、光緒年間の正文齋刻書一本が挙げられている。

さて北京図書館の現存本は以上に述べた涵芬樓の六六巻、寶礼堂の一巻、雙鑑樓の一巻を合せた計六九巻である。北平図書館善本書目(一九五〇年刊)と中国古籍善本書目はこの通りに著録し、近刊の北京図書館古籍善本書目は傅氏旧蔵の卷二九を欠巻として存六八巻とする。

しかし卷二九はわずか八葉であるものの、一冊として現にこれに含まれている。経眼錄に平準書と併記して傅氏蔵といふのは、表紙が異なるから不審であるが、北京図書館に入る前の宝礼堂との関係と経緯がどのようにわからぬ。

首二巻が補配本であり、卷三首葉も補配で、首葉が南宋初期刊本であるのは卷四からである。首題は「帝紀第四_(隔) 范畢_(隔) 後漢書四_(低八格) 唐章懷太子賢注」。この版心は白口で单黒魚尾、題は「後漢紀四」、下に丁付と刻工名が刻される。左右双边。一〇行・一九字。刻工名は読みとりにくいが、前出(二七五頁)のもの以外に一部から次の原刻刻工が採録された。

なお、同じく島田重礼、田吳炤の蔵印を捺し、宝礼堂から北京図書館に入った本に、経進東坡文集事略存三二巻一二冊がある。宝礼堂宋本書錄に「荆山田氏得之日本島田翰氏、卷首並録翰父重礼氏跋」とい、島田氏等の

蔵印のほかに、「荆山田氏/蔵書之印」「田偉/後裔」「景偉/虞印」があるとする。北京図書館古籍善本書目にも、「田昭跋並録島田重礼題識」とある。

後漢書存一〇六巻 「南宋初期」刊(いわゆる景祐刊本)(補配宋慶元建安黃善夫刊本・宋嘉定元年蔡琪一經堂刊本・南宋後半期福唐郡庠刊元修本)

四〇冊(二七九頁)

マイクロフィルムによる閲覧。

本版および補配本の存巻はほぼ前著の通りであるが、目録の一部や卷三・九の首二葉などに、本版を覆刻した福唐郡刊元修本を補配している。

首二巻が補配本であり、卷三首葉も補配で、首葉が南宋初期刊本であるのは卷四からである。首題は「帝紀第四_(隔) 范畢_(隔) 後漢書四_(低八格) 唐章懷太子賢注」。この版心は白口で单黒魚尾、題は「後漢紀四」、下に丁付と刻工名が刻される。左右双边。一〇行・一九字。刻工名は読みとりにくいが、前出(二七五頁)のもの以外に一部から次の原刻刻工が採録された。

⁴王詢 ⁶印祥 ⁷印瑞 ⁸余安 ⁹李攷 ¹⁰金玘 ¹¹施元 ¹²洪吉
¹⁰徐玘 ¹¹徐真 ¹²徐雅 ¹³張安 ¹⁴張宏 ¹⁵張宗 ¹⁶張敦 ¹⁷張蕙

陳吉 陳宗 陳奎¹³楊守 楊玠 楊琪

卷六の前半などに補写葉の続く巻がある。補配の巻に「汪士鐘／曾読」印。

ルムによる。
副紙の裏面に、韓応陞の咸豐一〇年（一八六〇）と同九年の手識が次のようにある。（宝礼堂宋本書録にも著録）韓氏読有用書斎書目著録本。

三国志魏書三〇巻 「南宋前期」刊 「同中期」修
(いわゆる紹興本) 一六冊(三二二頁)

マイクロフィルムによる閲覧。

首の上三国志注表の第一葉は、許忠の刻工名を記すが補写である。

版式については前記とほぼ同じ。涵芬樓余書録に別本補配かという大小字数を刻する八人の刻工の葉は、ファイルムからは断定できないが、やはり補刻葉であろう。他はすべて原刻葉であり、衢州の刊記もまつたくないから、いわゆる衢州本とは別版とみざるといえない。

乾道淳熙年間の公牘紙の紙背に刷られたのは、卷四第一四一三九葉、卷五第六一九葉などである。
「涵芬樓」「海塩／張元濟／経収」印。

〔印文「應陞／手記印」（陰）「應陞審定」（陰）〕

「咸豐己未秋得此書於書友蔣恕齋」
版式については、涵芬樓余書録に基いた前著の記事とほとんど変らない。ただ宋諱欠筆のうち構溝字は、末五画の冉の中央の縦画を省くもので、これが避諱といえるかどうか。総じて欠画はさほど厳格ではないが、卷九夏侯惇伝で惇字を欠かないので、この本の刊刻の時期を示唆すると思われ、南宋前期刊と推定した。

卷二八第一八葉以下が欠葉。

藏園記。」

蔵印は「汪士鐘／読書」「趙／宋本」(巴)、「徐／渭仁」「曾爲徐紫珊所藏」、「応陛審／定宋本」「松江読有用書斎金山守山閣／両御人韓德均錢潤文夫婦之印」「甲子丙寅韓德均錢潤文／夫婦両度携書避難記」(陰)、「徳均／審定」(陰)、「韓印／繩大」(陰)、「价／藩」。

汪士鐘、徐渭仁、韓応陛、蔣恕斎、潘宗周等の手を渡つたものである。甲子と丙寅は同治二・五年(一八六四・六)であろう。錢熙祚による守山閣叢書の刊行は道光二十四年(一八四四)で、韓応陛もその年の進士である。

隋書存六五卷(卷一~九・一二三~一五・一九~二六・三二~七六(尾次))　〔南宋初期〕刊
〔同前期〕修　　一二冊(四二〇頁)

マイクロフィルムによる。そのため装訂、とくに表紙の状態がよくわからないが、旧蔵の藏園羣書経眼録に次のようにいう。

「按此書余庚申歲南游、獲之宝應劉翰臣啓瑞家、亦内閣大庫佚出之書也。原蝴蝶裝、厚繭紙褙封、黃絹爲衣、尚是宋代官裝、惜蟲蝕過甚、版心尽失、不可復治。爰命工重加裝訂、別選佳紙爲衣、而以蛻附焉。」

なお雙鑑樓善本書目ではこのうちの卷一二三~一五がなかつたが、傅熹年氏が補訂した経眼録はこれを含めて現在と同じ六五巻と著録されている。また庚申歳は民国九年(一九一〇)である。

副紙に沈兆奎(曾植)の題記一葉がある。

「藏園主人庚申一歳中得宋本礼記釀文／羣經音弁龍龕手鑑隋書通典水經注／輿地廣記歐陽文忠公居士集蘇文定公集／豫章先生集劍南詩藁汲古閣景宋本／唐国史補何義門校本淮南子穴硯斎／写本戰國策万歷七年大統曆以嘉平月／二十有二日爲祭書之会循年例也与祭者／仁和吳綬汾陽王式通武進董康陽湖／陶湘長白彥惠蕭山朱文鈞海寧長宗／祥吳興徐鴻寶浭陽張恂張允亮／吳江沈兆奎題記」。

また卷五末に「宣統辛酉二月沈曾植僭觀」の一行。隋書目録一葉。首題「帝紀第一(隔七格)隋書一／(低一〇格)特進臣魏徵上」、志の次行は「太尉揚州都督監脩國史上柱國趙國公臣長孫無忌等奉敕撰」。

左右双辺、一四行、二五~二六字・注文小字双行三二字内外。版心は多く破損しているが白口、单黑魚尾かとみられ、題は「隋書(列)伝幾」のようにみえるところ

があり、吳亮・毛諫等の刻工名もある。

宋諱は次のようにかなり厳格に欠画する。

玄弦炫眩絃弦鉉懸朗 軒轅 敬警驚竟境鏡 弘殷

匡胤

恒暭

禎貞徵懲

曙署樹屬豎

讓 琅勗

桓

完洹 構購達

慎字以下はまつたく欠かない。

卷四五第六葉、卷七六第一三葉以下が欠葉。

刻工の吳亮は南宋初期・前期刊の礼記鄭注（宝礼堂）・廣韻（靜嘉堂）・春秋經伝集解（同）・北宋末南宋初刊史記（歴史語言）の南宋前期修葉を、毛諫も紹興九年刊毛詩正義（杏雨書屋）・紹興刊文選（足利学校・書陵部）や吳亮と同じ春秋經伝集解や史記修葉、南宋初期刊春秋互札例言（宝札堂）を刻しているから、避諱とあいまつて南宋初期刊本と推定できる。修刻葉は文字が細めで端正であり、南宋前期、遅くとも中期にかけて行われたもののように、やはり慎惇字を欠筆しない。

右を総じて一四行本両唐書の系列にあり、すなわち両浙東路茶塩司刊の旧唐書、紹興七年ごろ湖州刊の新唐書と相前後して刊刻された本で、北宋刊本の覆刻本であろうと思われる。

蔵印は「北京／図書／館藏」以外にはない。

正史宋元版解題抄

新刊の北京図書館古籍善本書目はただ「八十五卷」とし、欠巻のあることをいわない（一一二八二番）。また、拙著四二五頁第三～五行は削除する。

隋書八五卷 元至順三年（一二三三）瑞州路儒

学刊「明」修 二〇冊（四四二頁）

マイクロフィルムによる閲覧のため、版式一般は次掲本のところで記す。

首に周似周の序が一葉。これは前著の一五五・六頁に、孫毓修の中国雕板源流考と斯道文庫蔵の饒州路本隋書の卷首に附綴された補写葉によつて移録したが、後者の文がほとんど正しく、第二行の空格の箇所が二字繰りあがり、末行の「于」が「於」であるだけである。原文は行一五・六字、むろん句読点はない。これと卷末の列銜等によつて、元至順中に江西湖東道肅政廉訪司の管下で史の刊行が計画されたこと、そのうちの隋書は瑞州路が担当して実現したことが明確になつた。

尾題「隋書八十五卷終（隔六格）列伝卷第五十」。続けて次行から五代史志跋二一行、その尾五行以下の写真を旧京書影（241）から採つて前著一五七頁に掲げたが、それとまつたく同じ天聖二年の上表、廉訪司の牒、列銜があ

る。

藏印は「愛日／精廬／藏書」（張金吾）、「周印／元美」、「婆菴」、「鐵琴銅／劍樓」（正方）、「鐵琴銅／劍樓」（長方）、「瞿印／秉淵」（陰）、「瞿印／啓科」（陰）、「瞿／潤印」（陰）、「良士／眼福」（陰）。

隋書存一五卷（卷一～一五） 元至順三年瑞州
路儒学刊「明」修 一〇冊（四四二頁）
後補濃紺色表紙（二五・九×一七・八^{セシ}）、襯装。
序を欠くがこれは前掲本に述べた。総目一葉がある。
本文首題「隋書卷之一／（低格）帝紀一（隔五格）特進臣魏徵 上」。卷一は「帝紀第一（低一〇格）隋書二／（低八格）特進（隔格）徵上」となる。

左右双边（一一・四×一三・九^{チセシ}）、ごく一部は四周双边。九行二字、卷三以後は一九一二字。版心線黒口、上象鼻に稀に字数、双黒魚尾、題は「帝紀卷一隋書」のように大題を下に小題を上にし、丁付と稀に刻工名を刻する。耳題がある。刻工名は前掲書ともで、山玉 少安 文夫 文曾 宇可 以安 季祥夫 秀夫 信中 張仁甫と單字の者が多数。

修葉がかなりあり、卷一はほぼ半分、全体として一割

強というところか。明前期ごろのものと思われる。

卷一第三七・三九葉、卷一四第一葉表が補写。挿入の紙片に「四十六冊」とあるのは、全六五卷の冊数か。各冊末に光緒三一年（一九〇五）の蔣衡の校語がある。種石兄架上見宋板隋書一冊世云九行廿字／本即此書係宋時天聖間刊本内有明崑／山慕堂葉文莊公藏書印文又汲古閣毛／子晋印惜内有南宋時補板十一是書／宋本中可謂完璧後得価三百金余家／有毛刻隋書向種石兄借是書對校／閱三月校畢知宋本美處約補三千余字 拙老人蔣衡偶記（卷三末）
乙巳六月初四日校 一冊（卷二末）
乙六月初五日校 二（五）
乙六月初七日校 三（七）
乙六月初八日校 四（九）
乙六月初十日校 五（一〇）
乙六月十二日校 六（一一）
乙六月十三日校 七（一二）
乙六月十四／日揮汗校／共十五簽 八（二三）
乙六月十六日／已正校畢／共二十簽 九（三四）
六月十八日校／共九簽 一〇（二五）
卷三末の手跋の一部、宋版と誤るところは前著にも引

いたが、これが全文である。卷一を光緒三一年六月四日から校合しはじめたわけであるが、早いペースで行われたようであるから、全六五巻を「三月校畢」は翌年のことか。校合の結果は、自藏の毛氏汲古閣本の方に書入れられたのであろう。

蔵印「葉氏／慕竹堂／藏書」(精)（葉盛・葉恭煥）、
「毛氏圖／史子孫／永保之」(宋本)（葉盛）「開卷／一樂」(精)
（毛晋・毛表）、「季振宜／藏書」、「席鑑／之印」(陽)
「席氏／玉照」、「張印／月霄」、「愛日／精廬／藏書」(張金吾)、「上寿／堂印」、「林／橋」、「海塩／張元濟／經所」
「涵芬樓」「涵芬／樓印」。

一九五九年北京図書館善本書目にはみえなかつたが、新しい北京図書館古籍善本書目には「元至順三年瑞州路儒学刻明修本 蔣衡跋 十冊」と著録される存一五巻（七三五七番）である。この本には刊序がないが、北京図書館には前掲本のほかに、大德饒州路刊本と補配しあう本が一部あり、比較して至順瑞州路刊本とは容易にわかるのである。

ところが蔵書印を一見して驚いたことに、これは前著四二三一五頁に「南宋刊九行本」として一項を立てて記述した本なのである。責任を転嫁するわけではないが、

いかに名士の書誌解題でもそれを盲信しては大きく誤ることの好例であつた。王国維（伝書堂善本書誌）、張元濟（涵芬樓藏余書錄）の両氏とも、宋刊といい、行「廿二字」（蔣跋の廿字も引く）あるいは「十九至二十一字」とし、宋譯欠筆のことなどを記していたから、鉄琴銅劍樓元本書影の卷一首の二二字の瑞州路本と同版であるとは夢にも思わなかつたのである。

たしかに卷三以下は一行の字数が減り、また宋譯欠筆が残るが、卷一、二は二二字であり、四周双边であつて、字様もまた元の官刻本のものである。ここに前著の記事の結論を標記のように訂正したい。

前掲本にも愛日精廬の蔵書印があつたが、同蔵書志に元刊本一部を著録し、巻末の天聖二年上表等の一文があることをいう。この本も当時は六五巻存したが、序跋のことにつれないので前掲本の方かと思わせるものの、短い文でどちらの本のことかわからない。

さらにそれに続く宝礼堂宋本書録の九行二〇字本も、刻工名をみればこれと同版である。結局、四二二頁以下の「南宋九行本（一九一—二二字）」の一項はひとまず全面的に削除し、訂正を加えて四四二頁以下の元至順三年瑞州路儒学刊本のところに移していくことになる。

同版本は日本と台北になく、序跋にしても巻末の天聖二年の勅と官銜にしても、推定によつてこの本のものとしていたが、これは誤つていなかつた。中国古籍善本書目によれば、なお上海図書館に一部、天一閣文物保管所と安徽図書館に各一部が蔵されるという。

五代史記七四巻 元大德鉛山州宗文書院刊〔明初〕修 二〇冊（五六一頁）

新補紺色表紙（三〇×一八・八^{セン}）、襯装。

五代史記序、五代史記目録、そして本文。版式については前記の通り。ただ刻工名に少々追加するものがある。

²人禾 ³子明 ⁴王徳明 ⁷沈亨 ⁹若虛 ¹⁴趙仁寿

刻工名の上に「宗」「宗文」「学」の字を冠する例は多い。そして巻末、つまり巻七四の尾題の次行に、「宗文書院刊」の一行があつた。この葉は上方、約三分の一が

破損しているが、刊記は実在したのである。従つて前著で内閣文庫の明修葉の刊記に基いて「崇文書院刊」としていたのを、「宗文書院刊」と改める。因みに、北京大學図書館の馬玉堂旧蔵本も明初修本であるが、これはこの最末葉を欠いていた。

料紙は黄色味を帶びたものが大半であるが、一部に白

色紙が含まれている。ただし同時の刷りで、補配葉とは思えない。巻三末の第四葉の表の末行と裏葉、巻一二第六・七葉・巻四〇第四・五・一〇・一一葉は明初ごろの補刻とみられる。巻一八第二葉、巻五九第一・六葉、巻六〇第六葉は補写。

「垚丰／山房」印。巻三三末（第八冊末）に「学」に始る大型長方印が捺されているが、以下の字の部分は削られている。

元大德九路儒学刊十史のなかで、晋書と五代史記は刊刻を担当した路を特定できないでいたが（前著一三四頁）、新編方輿勝覽巻一八江東路信州の学舎の項に
宗文書院在鉛山縣鵝湖寺淳祐庚戌江東提刑蔡抗建奏請于朝

とあるものが刊記の宗文書院であると思われ、五代史記は鉛山州が担当したと断じてよからう。

以上の調査は北京図書館の任繼愈館長、善本特藏部張國風・方廣鋗両主任、それに同館善本室で中国古籍善本書目子・集部を編纂中の冀叔英・沈燮元先生、中華書局の李侃前総編輯、北京大学の倪其心教授、その他の方々の高配をいただいて行われた。沈先生には文中に記したように書面でもご教示をいただき、北京大学古典文献研究所の陳捷女士にも協力を仰いだ。深謝するところである。